

(完結) コラボ作品！新アヴェ(下)VSナマモノ！シンフォギア界アニマルNo.1三本勝負！！

クロトダン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この作品はタツツマンさんの作品「気づいたら新宿のアヴェンジャー（下）になってた一般人」と私クロトダンの作品「シンフォギアの世界にネコアルクを投入したら面白おかしくなるんじゃないかね？」のコラボ作品です！

あらすじはネコアルクが新アヴェ（下）のいる世界に殴り込みに行き、どちらがアニマルNo.1にふさわしいか勝負する話です。

型月界、最初のアニマルと型月界、最新のアニマルの夢の対決!?!  
誰にも予想できない戦いが今始まる！

タツツマンさんに許可をもらい奇跡のコラボが実現できました！

7月10日、完結しました。

## 目次

0本目！N.O. 1アニマルはこのアチシにや！	1
一本目！（前哨戦）1位になるには手段は選ばない、それがアチシにや	4
一本目！ネコアルクを探せ！かくれんぼ対決！！	11
二本目！捕まるな！追いかけてっこ対決！！	20
三本目！勝利を掴み取れ！フラッグレース対決！！	31
終幕、ナマモノ平行世界襲撃事件（尚、ナマモノは吊るされている）	

0本日！No. 1アニマルはこのアチシにや！

——始まりはナマモノが持つある一冊の本から始まった——

——ネコアルク視点——

ドウモ、ミニヤサン。お久しぶり、アチシネコアルクにや！

イヤー、何故か凄く久しぶりな気分。どれくらい久しぶりだっけ？  
んーと……一ヶ月位？

——ピンポーン——

『スママセーン！アマゾネス・ドットコムです！』

「あ、ハロー！今行くにや」

頼んでいた荷物が届き、アチシは玄関に向かい、ドアノブに手を伸ばして扉を開くと、目の前に眼鏡をかけ、黒いネクタイを着けたまさしくアマゾネスみたいな服装をした銀髪の少女が荷物を持って立っていたにや。

「あにや？これはこれは、社長自ら荷物を運んでくれるとは、どうもありがとにや。肉球判でいいかにや？」

「何、アマゾネス・ドットコムはまだまだ発展途中だからな。社長自ら動けば利用者が増える筈だ。構わないぞ、ここに押ししてくれ」

——ポンツ——

「それでは次もアマゾネス・ドットコムをよろしく頼む」

「ありがとうにやー……さてと」

アマゾネス・ドットコムの社長さんが帰って行くのを見送ったアチシは、直ぐにリビングに設置してあるアチシ用のソファア（ペットシヨップにある少し大きめのやつ）に座り込み、荷物の包装紙を剥がたにや。

包装紙を剥がし終わると中からメイド服を着たキツネ耳と尻尾を生やしたピンク髪の女がオムライスを差し出している表紙がプリントされた【月刊みんなのアニマル】と書かれた雑誌を手取るにや。

「さーて、今月の型月アニマルランキング、アチシは何位かにやー？」

アチシはランキングの順位が気になり、笑みを浮かべて雑誌を開いて目的のページに目を通す、そこには――

「……………なんじゃこりやあああああつ?!?!?!?」Σ(Φ皿Φ\*)

——そこには信じられない光景を観てアチシは思わず大声を挙げてしまったにや。

それは…………。

・  
・  
・

【今月のN.O. 1アニマルは、第〇〇番世界にいるロボ君に決まりました!】

【二位になった決めてはやはりこのモフリがいがある毛並み!】

ロボ君の飼い主である少女Cさん曰く、『ロボの毛並みは柔らかくて、抱きしめて寝ると気持ちよく寝れるんだ』との事です。

確かにロボ君の毛並みは柔らかかそうでモフリがいがありそうですね!私もロボ君にモフってみたいです!】

・  
・  
・

【馬鹿にや…………?!?このアチシが一位ではない…だと!?!】

アチシは床に両手と両膝を付いてあまりのショックで言葉を失ったにや。

※ちなみに、アチシはランキング最下位で、コメントには【目が気持ち悪い】【ネコというか宇宙人?】【つかこれ生物か?】等が書かれ

ていたにや。

「……ふ、フッフッフツ、にやーハツハツハツ!!面白い。このアチシを  
さておいて一位になるとは……生意気にや!」(??ω??)キュピーンツ  
!

アチシは懐から紙とペンを取り出して、この部屋の家主である二人  
の少女宛に伝言を書き記した後、「キャッツ・ワールドゲート」を発動  
して並行世界に通じる扉を呼び出したにや。

「待っているロボよ!今からアチシがそちらに行き、どちらがN.O.  
!アニマルなのか白黒付けようかにや!」

アチシはこれから向かう先にいる狼に向けてそう言った後、ロボの  
いる並行世界へ渡って行ったにや。

——ネコアルク視点、終了——

一本目！（前哨戦）1位になるには手段は選ばない、それがアチシにや

——ロボ視点——

やあ、新宿のアヴェンジャーの下のほうに転生した一般人だったロボだ。

キャロルが起こした《魔法少女事変》から三ヶ月が経過して、エルフナインちゃんも復活して、街の復興も着々と進み始めて、漸く平和になったよ。

俺は 크리스ちゃんが学校から戻ってくるまで自宅で留守番しているんだけど、なんか今朝から誰かに視られている気がして落ち着かない。

誰かいるのか部屋を見渡しても誰もいないし、隠れているのかと思いい匂いを嗅いでみても、いつもの家の匂いがあるだけだし…なんか落ち着かない。

誰かいないかも一度部屋を見渡してみる。

大きなテレビ、大きなソファ（クリスちゃんはずっと俺をソファーにしているから、あまり使ってない）、クリスちゃんのご両親の仏壇、普通の棚、二本足で直立して腕を掲げているネコの置物、冷蔵庫の中、うーんやっぱり誰もいない。

一体、なんだろうな？

『あれ？どうしたんですかロボさん？そんなウンウンと唸って？』

あれ？セレナちゃんいつの間にならなくなったの？最近見なかったから、どうしたのかと思ったよ。

『えっ、ずっと側にいましたよ？』

オウ：マジか。気が付かなかったよ。

『フフ、大丈夫ですよ。それで？どうして唸ってたのですか？』

ああ、実は今朝から誰かに視られているような感じがしてき、それがなんなのか落ち着かなくて。

『んー、私も今朝からここにいましたけど、何も変わった様子はみら

れませんよ?』

そっかし、……お! いいこと思いついた!

俺は全体を見渡してから、この状況を打開するあの言葉を言った。

……貴様、見ているな!

『なんですかそれ?』

いや、視られているときはこれを言えばなんとかなるかなあと思っただけど、やっぱり何も変わらな——

「フツフツフツ……まさか、気配と匂いを消したアチシに気付くとは、さすがはアニマルランキング1位のロボだにや」

なっ! 何処から声が……! 誰だ! 何処にいる、姿を現せ!

「フツフツフツ……よかろう! お望み通りアチシの姿を見せてやろう! ソイニヤッ!」

—パカッ—

ソファアのクッションの下からナニか出てきた。

!?!  
「ソファアの下にこんなスペースを

「ニヤッハッハッハッ! アチシネコアルク! しがにやいたただのネコにや! よろしく。」

スペースは昨日の夜中に忍び込んで勝手に作ったにや」

は? ネコアルクって確か月姫に出てくるネコみたいな生物だよな? なんでここにいるんだ?

いや、それ以前に不法侵入!?! そして、人ん家のソファアを勝手に改造してなんで偉そうにしてんのお前!?!

『ネコアルクさんって言うのですか? 私はセレナ・カデンツァヴナ・イヴです。幽霊をやってます!』

「あにや? こっちの世界のセレナちゃんは幽霊なのかにや? にやんか変な感じ」

ちよつとセレナちゃん……しれつと自己紹介しないで突っ込んで



くれるかな？

というか、こつちの世界？その言い方……もしかしてお前、並行世界からやってきたのか？

「That's right! その通りアチシはお前に用があつてきたにや」ゴソゴソ

俺に？

「えっとそれはねー……お前の命を殺る為だにやアアアアアアアッ！」

何の用だと首を傾けてネコアルクに質問すると、目の前のナマモノがどこからか出した刺付きの棍棒を振りかざして襲い掛かつて来た！

ーベシンツー

「グベシツ!?!」

まあ、こいつの身体小さいから前足で上から押さえつけるだけであつさりと終わったけど。

ーガチャツー

「ただいまロボ」

あ、クリスちゃんお帰りー。

「留守番ありがとな。あたしの留守中何も起こらなかったか……つて、何かいるううううつ!?!」

クリスちゃんが俺の前足に潰されているネコアルクを見て声を挙げた。

まあ、びつくりするよね普通。

ーロボ視点、終了ー

・  
・  
・

ー S. O. N. G. 本部 ー

ヨツスヨツス、アチシネコアルク。無事にロボがいる世界にやって来たにや。

この世界のクリスマスちゃんの家お邪魔に侵入して、ロボを亡き者(亡き獣?)にしようと思っ掛かってみたんにやけど……あつさり返り討ちにされたにや(ΦωΦ)オノレ

今アチシはこの世界のS・O・N・Gの司令室に連れていかれ、そこでこの世界の弦ちゃん達に事情を説明してる途中にや。

「それで、君は何故ロボ君を亡き者にしようとしたんだ?」

「そうだ!なんであたしのロボに手を出そうとしたんだよ!下らない理由ならただじゃおかねえぞ……っ!!」

おおぅ…、さすがクリスマスちゃん。並行世界でもその気迫は変わらにやいのね。

「いやー、実はこの雑誌のランキングを見たからにや」

アチシはキャッツストレージから、「月刊みんなのアニマル」を取り出してみんなに見せたにや。

「へー、いろんな動物が写っているんだ?」

「可愛い動物がいっぱいデス!」

『あつ!金色の羊もいるんですね!』

「ちよつと待って、どうみても動物には見えないのが写っているけど……なに、この大統領って?着ぐるみ?」

アチシが渡した雑誌にみんなにやがページを開いて、各々感想を口にしたにや。

まあ、マリアさんの言う通り動物には見えないものもあるけどね。

大統領とか、自称呂布とか、ジャガ村とか、猫なのか犬なのか狐なのかわからんメイドとかにや。

「あれ?この雑誌?」

「どうした雪音、見覚えがあるのか?」

次のページを開いているとクリスちゃんがあるページを見て声を  
出して、翼さんに声をかけられたにや。

「あ、その……。少し前にネットで《みんなの自慢のアニマル》って、  
募集をしてるのを見てさ。」

その文に―【自慢のアニマルの写真を投稿して、No. 1アニマル  
を決めよう】―って書いていたから、ロボに内緒で送ったんだ。

まさか1位になってるとは思わなかったけど……」

「なるほど…。それでこのランキングで1位になったロボを見たお前  
はロボを亡き者にしようとかこの世界に来たのか」

「大正解！」

さっすが翼さん。やはり、どの世界に行っても翼さんは翼さんにや  
ね（お胸も同じにやね）

「今、何か言ったか？」

「言つてにやいにや」

鋭い。

「しかし、1位になるためとはいえ、実力行使にうつるのは関心しない  
な」

「師匠の言う通り！だってロボ君の毛並みこんなにモフモフなんだよ  
！ほら、触ってみたらその良さがわかるよ？」

ムムム、そこまで言うのなら触つてあげるにや。だがしかし！

「こんなものでアチシが堕ちると思わにやい事にやつ！」

――1秒後――

「フニャアアア………ッ」

『「」「」堕ちるの早っ!?!」「」「』』

ハッ！（。ロ。）

「ち、違うにや！まるで全てを包み込むようなモフリ具合に思わず身  
を委ねた訳じゃにやいにやー！」

「いや、普通に堕ちてんじゃねーか」

………はい、そうです。

「何がしたいのお前？」

クリスちゃんに指摘され、アチシの後ろにいる狼に言われてしまったにや。

——ネコアルク視点、終了——

・  
・  
・

——響視点——

「ただいまー！」

「遅くなってごめんねネコアルク。訓練が長引いちやって、すぐにご飯の準備するからね」

「あれ？ネコアルク？いないの」

留守番してる筈のネコアルクの返事が返って来ない事に私達は首傾げて、リビングに向かった。

「やっぱいない」

「こんな時間じゃないなんて珍しいね？今日は非番だったよね？」

「うん、昨日ネコアルクが言ってたから、間違いないよ。……あれ？」

テーブルに目を向けると私達の名前が書かれた紙が置いてあった。

「それ、書き置きかな？」

「そうかも、読んでみるね？えーと、何々……」

『ちよつくら、並行世界に殴り込みに行ってきます。心配にやいにや。すぐ戻るの、探さにやいでください。』

byネコアルク』

……なんかとんでもない事が書かれていた！

「何やってんのネコアルク!？」

「大変！すぐにみんなに知らせないと！」

「うん、行こう！未来！」

私は未来と一緒にS・O・N・G.に向かいながら師匠に連絡をした。

「私が行くまで騒ぎを起こさないでね！ネコアルク!!」

——響視点、終了——

一本目！ネコアルクを探せ！かくれんぼ対決！！

——森の中——

——ロボ視点——

どうも、ロボだよ。

今、俺達は森の中を歩いている。

なんで森の中を歩いているのかと言うと、俺の命を狙ってくるネコアルクを納得させる為におっさんがある提案を持ち掛けた。

・  
・  
・

『にや？三本勝負？』

『ああ、勝負は三本制で先に二本先取した方が勝ちだ。勝負方法は君が決めていいが、命のやり取りや危険なルールでなければ、何をしても構わない。』

それで納得してくれないか？』

『んー。まあ、他ならない弦ちゃんの頼みにやし、アチシはそれで構わないにや』

『げ、弦ちゃん？』

・  
・  
・

んで、勝負内容を決めたネコアルクが、指定した場所に俺を含めた装者全員が森の中を歩いている。

『空気が澄んでいて、気持ちいいですねー』

いつも通りだね、セレナちゃん。

「しつかし、ネコアルクって奴はなんで勝負の場所をここに指定したんだ?」

俺の隣で歩いているクリスちゃんが、ネコアルクが何故ここにしたのか首を傾げる。

うん、俺もそう思う。

しばらく歩くと、ネコアルクが指定した大きな岩が置いてある拓けた場所に辿り着いた。

「ここかな?」

「あの子が言っていた目印の岩があるし、間違いないじゃない?」

響ちゃんとマリアさんが場所を確認していると……。

「ニヤーツハツハツハツ!!よくぞ参った、ロボと装者達よ!」

突然、辺りにネコアルクの声が響き渡った!

野郎!何処にいる!

「フッフッフツ……、もう勝負が始まっているのにそう簡単に姿を現したら意味にやいにや」

えっ?もう始まってんの!?

「はあっ!?どう言う事だよ!聞いてないぞ!」

「そうデス!卑怯デスよ!」

クリスちゃんと切歌ちゃんがネコアルクに文句を言うが、当のネコアルクはそれを気にせず、そのまま言葉を続ける。

「フツ……勝負に卑怯と言うとはまだまだオケツが青いお子様にやね」

「なんだ(デス)とお?!」

ネコアルクの煽りに二人だけでなく、他の四人もやる気に火が付いた。

「やる気が出た所で、ルールを説明するにや」

いや、遅いよ。自分の首を絞めるだけだろ。

「ルールは簡単。ロボと装者達は力を合わせて、制限時間の三時間以内にこの森の中にいるアチシを見つけて捕まえる事にや。」

捕まえる方法は攻撃をしても大丈夫だから遠慮なくしても構わないにや」

「あら？攻撃してもいいのね？」

「それではこちらも遠慮なしに行かせてもらおう……」

「…お子様って言った事を後悔させてあげる」

ネコアルクの説明を聞いて、更に殺る気（誤字じゃないよ）の炎が燃え上がる。

死んだなあいつ。

「それでは改めて、よいスタート！」

—ガサツ！—

「」「」……「」「」

開始直後に早速見つけちゃったよ、おい。

「喰らいやがれっ、このネコモドキッ！」

【—MEGA DEATH PARTY—】

【—蒼の一閃—】

【—EMPRESS†REBELLION—】

【—切・呪りeツTお—】

【—α式・百輪廻—】

—チユドドドドドドンツ!!—

響ちゃんを除いた全員の遠距離攻撃がネコアルクに集中して、土煙に包まれる。

生きてるかなこれ？

土煙が晴れると、地面に倒れたネコアルクがそこにいた。

ピクリともしてない。えっ、マジで死んじゃった!?

『あ、なら私と同じ幽霊になりますね?』

いや、セレナちゃん、そういう問題じゃないよ!

おい、大丈夫かネコアルク!

俺はネコアルクの傍に寄って、無事かどうか確認しようと顔を近付けると……。



—ボンツ！—

《ハズレ》

ネコアルクの身体が爆発した後、ネコアルクがいた場所にハズレと書かれた一枚の紙が置いてあった。

「…ハズレ？」

「どういう事デス？」

「あ、そうそう。一ついい忘れた事があるにや」

俺達が驚いていると、再びネコアルクの声が聞こえてきた。

「今倒したのはアチシの分身にや。しかも質量を持って、匂いや能力もアチシと同じである。ハイスペックな分身にや！」

イヤイヤイヤ！質量を持ちながら、オリジナルと同じ能力を持っているって、それ本当に分身かつ!?

「し、かも、デコイを倒すと倒した人にペナルティを受けて貰うにやは？ペナルティ？」

「そのペナルティは、アチシの偽物を倒すと倒した人に………見た目が変わらず、倒した数の分だけ一体に付き一日間、体重が1kg増える事にや!!」

なっ！

「…」「…」「なんだってええええええっ!?!」「…」「…」

あ、あいつ…女性にとって、一番嫌なペナルティを入れやがった……っ!?

「フッフッフ…」、それでは皆さん制限時間までに残り9.9.9体のアチシ達から、本物のアチシを見つけてご覧？ニヤーツハツハツハツハツ!!」

笑い声を挙げた後、ネコアルクの通信が終わった。

えーと、皆さん？

「体重が……増えるだと？」

「嘘よ…嘘だと言って！」

「…本物を捕まえる為に偽物を倒さないといけないなんて…」

「乙女にとって、残酷な罰デス…！」

翼さん、マリアさん、調ちゃん、切歌ちゃんが残酷なルールに身体

を震わせる。

あのナマモノ、なんて恐ろしいルールを作りやがった…!

俺はこのルールを作ったネコアルクの度胸にある意味尊敬してしまおう。

「……おもしれえ」

あれ? クリスちゃん?

「やってやろうじゃねーか、あのネコモドキ……ッ!! 捕まえた後、あたしらにこんなクソみたいなルールを作った事を後悔させてやるよ!!」

おおっ!?! クリスちゃんから怒りの炎が燃え上がっている!?!

「……フツ、雪音の言う通りだな」

「そうね、ならあのナマモノに目にももの見せてあげましょうか」

「…乙女に触れてはいけないタブーに触れた事を……」

「後悔させてやるデース!」

「最速で、最短で、真っ直ぐにあの子を捕まえてみせる!」

他のみんなもクリスちゃんに触発されて、同じように炎が燃え上がる!

てか、どうなってるのそれ? 熱くない?

「行くぞお前ら!」

「」「応っ!!」「」

お、おーう。

俺とナマモノの勝負なのに、いつの間にか装者達全員の勝負になってたよ。

そう思いつつ、俺は先に行くみんなの跡を追いかけに行った。

——ロボ視点、終了——

・  
・  
・

——ネコアルク視点——

ニヤツハロー、皆さん。ネコアルクにや。

イヤー、遂に始まりましたアチシ対ロボの対決。

今回考えた勝負はかくれんぼ対決。

しかもただのかくれんぼではにやい、アチシが出した999体の分身がこの森の中に潜んでいるにや。

まあ、ルールを説明する為に早速1体倒されたけど……。

だがしかーし! (??ω??)

「自身の体重が増えるの恐れながら、アチシを含めた残り999体の分身の中から、本物のアチシを見つけ出せる事が出来るかにや? ニヤーツハツハツハツハツ!!」

『報告シマス』

おや? 分身732番どうしたにや? まだ定期報告には時間がある筈にやけど?

『ハイ、装者達ニヨツテ、分身達ノ数ガ300体倒サレマシタ』

そうかそうか、もう既に300体も倒されて……って、ハアアアアアアアツ!?

「ちよつと待つにや! もう300体も倒されたのアチシの分身!?

まだ始まって20分しか経ってにやいのに早くない!? それが本当なら、一人辺り30kgも増えた事ににやるよね!?

『ソウハ言ツテモ、事実デスカラ……ア、更ニ200体ノ分身ガ倒サレマシタ』

早っ!?

まさか、ここまでの力とは……っ!?

えっ、これアチシヤバくない?

『ア、更ニ100体ノ分身ガ倒サレマシタ』

「うっそでしょっ!?!」

さっきのと合わせて60kgの体重増加してるのに、向こうは体重が増えるのは怖くないのかにやっ!?

『あ!』

「あ?」

アチシの背後から声が聞こえて、振り向くと幽霊のセレナちゃんと目があつたにや。

『「……………」』

無言になるアチシ達。

『エヘッ』ニコリ

「ニヤハッ」ニコリ

セレナちゃんが笑顔を見せると釣られてアチシも笑顔になったにや。

『ロボさーん！見つけましたよーっ！』

「ちよおっ!?それズルくにやいつ!?」

まさか、分身を倒している間に幽霊のセレナちゃんにアチシの居場所を探らせるとは…………っ!?

「ナイスだ、セレナちゃん！」

「漸く見つけたあー！」

ニヤアアアッ!?見つかった!?

「手間をかけさせやがって、このネコモドキイ…………！」

「苦痛だったぞ、貴様の偽物を倒す度に私達の体重が増える感覚は…………っ!!」

「わかる?あなたの偽物を倒した瞬間、体重がどんどん増えていく私達の気持ちだが、あなたにわかるかしら…?」

ひ、ヒイイイイイイイツ!?文面にもわかる、みんなの身体からイグナイト顔負けのどす黒いオーラが溢れ出てるウ!?

「イヤ、本当に怖かった。一体倒していく毎にみんなから表情が消えていくのは本当に怖かった」

おう…、もしかしてやり過ぎた?

「もしかしなくてもそうだろう」

デスヨネー(ΦωΦ)ニヤハー

「それじゃあ…覚悟はいいな?」ジャキッ

「最後に言い残す事はないか?」チャキリ

みんなが各々のアームドギアをアチシに向ける。

そうにやねー、しいて言うなら…………。

「しばらく体重計を見るのが怖そうにやね！」

―ブチイツー！―

「二二喰らえエエエエエエツ!!」

「ギニャアアアアアアアアアアアツ?!?!」

アチシの言葉を聞いて、ブチ切れた装者達の怒りの全力攻撃を受けて、アチシの意識は途切れたにや。

ガクツ……。

――ネコアルク視点、終了――

―― S・O・N・G 本部――

――響視点――

「何いつ!?!ネコ君が一人で並行世界に行っただとおっ!?!」

「はい!そんなんです師匠!」

私は未来と一緒にS・O・N・G 本部に着いて、先に到着していた装者のみんながいるのを確認した後、ネコアルクが残した書き置きについて説明した。

それを聞いた師匠はいつもより大きな声で驚いた。

「まさか、ネコアルクが単身で並行世界を渡れるとは……!」

「本当、規格外な存在だよなあいつ」

翼さんが顎に手を当て、ネコアルクの能力について驚いて、奏さんがそれに同意する。うん、私もそう思います。

「たくつ、さつさとあの馬鹿ネコを連れ戻さねーとな!」

「問題はあの子がどこの並行世界に向かったという事ね……」

「何処に行ったんでしよう…ネコアルクさん？」

そうなんだよねー。書き置きには並行世界に行くとかだけ書いてあつて、何処の世界に行ったのかわからないんだよねー。

「こうなったらしらみ潰しに探すしかないデースー！」

「…切ちゃんそれじゃ時間がかかるよ？」

「うーん、師匠どうしたらいいと思います？」

私は師匠に何かいい案がないか聞いてみた。

「…いや、切歌君の言う通りにしよう。各世界に装者達を送ってネコ君を探して貰う。

そして、ネコ君を見つけたら身柄を確保、すぐにこちらの世界に戻るように」

「「「「「了解！」「「「「「」」

私が行くまで誰にも迷惑をかけてないでね、ネコアルク！

——響視点、終了——

二本目！捕まるな！追いかけてっこ対決！！

——ロボ視点——

—モフリ……モフリ……—

やあ、只今装者達にモフられているロボだよ。

—モフリ……モフリ……—

最初の対決でネコアルクから一本取った俺達は次の対決が始まるまで、拓けた場所で休んでいる所だ。

—モフリ……モフリ……—

最初の対決が終わった後、ネコアルクが（多分装者達の絶望の顔を見る為に）用意した体重計を見た彼女達は増えてしまった自分の体重を確認した途端、死んだ目をしてから地面に倒れ込んだ。

—モフリ……モフリ……—

その光景を見た俺はみんなを慰めようと頭を擦り付けた後、横になつてされるがままみんなにモフられている。

—モフリ……モフリ……—

まあ、お察しの通り自分達の体重を見たショックでいつものモフリ方ではなく、少しずつ俺をモフっている。

ほ、ほら、もつとモフってもいいよ？いつも以上にモフってもいいんだよ？

それに今日はお腹もモフってもいいぜ？ほら？ほら？だから元気出して？……ね？

—モフリ……モフリ……—

駄目だ……、小一時間俺をモフモフしても彼女達の傷付いた心はまだ回復仕切れてない。

やり過ぎだよあのナマモノ……。

「体重が……体重が……」ブツブツ

「クロス……あのナマモノ……クロス……」ブツブツ

「許せないデス……滅多切りデス……」ブツブツ

……あの、ネコアルクが許せないのはわかるけど、もう少し声を小

さくしてください。本物の怨霊みたいに聞こえて怖いから。

『うらめしやー』

セレナちゃん、君がやっても怖いというよりかわいいからね。

『ムウ…、残念です。ロボさんを怖がらせるチャンスと思ったのですが……』

いやどつちかって言うと、ネコアルクの偽物を倒していく毎に無表情になるみんなの顔がフィーネやネフィリムを相手した以上には怖かったわ。

モフリ……モフリ……

「ニヤツホー！みにやさんお元気ー？」

みんなが無言でモフっていると、身体中に包帯を巻いて、顔全体に噛み跡を残したネコアルクが空気を読まず、笑顔で挨拶してきた。

この光景を観てそんな感想を言えるお前は今すぐ眼科と脳外科に行ってこい。

「いやー、袋叩きの後にその狼にマミられるとはにやー……流石のアチシもヤバかったにやー。……その後、三途の川にいるご先祖達に追われたけどね」

そのまま逝けばいいのに……。

「んー、返事がにやい？なら仕方になやい、アチシから元気になる言葉を送ろうではにやいか」

元気になって、こんな状態にした本人（本猫？）が何を言うつもりだ？

「フ、フ、フ、それは……みんなにやが倒したアチシの分身を倒した数を個人ごとに報告します！」

モフリ…モフーピタツー

ネコアルクの声を聞いたみんなが俺をモフるのを止めて、ゆっくりと油が切れたように顔をネコアルクに向ける。

あれ？クリスちゃん？突然立ち上がってどうしたの？それに他のみんなも……ヒイツ！？

呑気に笑っているネコアルクを冷めた目で見てるとクリスちゃん達が静かに立ち上がると、鬼……いや、修羅のような雰囲気纏って、



無表情でネコアルクに音もなく近付いていった。

「あにや？・みにやさんお揃いでアチシに何か用かにや？」

いきなりアチシの手を握るなんて？

ん、もう片方も？にやにやつ？両足も握って、アチシを持ち上げてどうするにや？

……あの、お顔が怖いですよみにやさん？

あ、ちよつと待ってアチシの間接はそれ以上曲がらにや——ギ  
ニヤアアアアアアアアアアアアツ！！！！

クリスちゃん達に処け……お仕置きされるネコアルクから俺はソツと顔を逸らす。

因果応報だよ、お前のふざけたルールのせいで落ち込んでいるのに、加算体重を言おうとしたら、みんながそうなるのは無理もないよ。いつものクリスちゃん達から想像できない行動に俺は黙ってそれが終わるのを待った。

・  
・  
・

——閑話休題——

「そ、それでは二つ目の勝負の内容を発表するにや……」ゲフツ

しばらくして少しスッキリしたクリスちゃん達にボコられたネコアルクは吐血しながら次の勝負内容を発表した。

「二つ目の勝負は……鬼ごっこにや！」

鬼ごっこ？

「ルールは簡単。装者達は森の中に入り、制限時間の二時間以内にアチシから捕まらずに逃げ切れれば勝ちにや。」

あ、因みにすぐに捕まってもつまらにやいから、アチシは開始して

から十分後に行動するにや。

更に逃げる側は捕まらないようにアチシを攻撃してもいいけど、アチシも捕まえる為に攻撃するからよろしくにや」

ネコアルクが言った内容に首を傾げていると、響ちゃんがネコアルクに質問した。

「えっと、ネコアルクだっけ？その内容だと君が凄く不利だけど大丈夫？」

「フッフッフツ、心配ご無用にや響ちゃん。アチシにとっちゃ、この程度は朝飯前にや！ニヤハハハハツ!!」

いや、強気だなお前。その自信はどこからくるの？

そう言つて笑いながら装者達を煽っているネコアルクを俺はジト目で見た。

「それでは、ヨーイ……スタートオ！」

・  
・  
・

スタートして三十分が経ち、俺達は捕まらないように三組に別れて移動している。

「そろそろあいつが出てきてもいい頃だよな？」

スタート地点の方向を見て、俺の背中に乗ったクリスちゃんの言葉にそうだねと俺は頷く。

因みに組分けは俺とクリスちゃんチーム、響ちゃんと翼さんチーム、マリアさんと調ちゃんやんと切歌ちゃんチームに別れている。

予想通りの組み合わせだつて？うん、俺もそう思う。

まあ、それはさておき……そろそろあのナマモノが出てきてもいい頃合いだけど、全然出て来ない。

……まさか迷っているのか？

広い森だし、探している内に迷ってしまうのも無理はないか。

まあ、例えそうなつても時間切れでこちらの勝ちになるし、その後にあいつを探せばいいか？

俺が呑気にそう考えていると――。

「うあああああああああつ!!」

聞き覚えのある声が森中に響き渡った。

というかこの声って……。

「先輩達の声!?二人に何かあつたのか!」

そう、別れて逃げている筈の響ちゃんと翼さんの悲鳴が聞こえたからだ!

二人に何かあつたのか心配していると――。

――ピンポンパンポン――

『えー、逃げているみんなにやにお知らせにや』

「なんだ?」

どこからかネコアルクの声が辺りに響き渡る。

てか、この辺スピーカーなんてないけど、どうやって流しているのそれ?

『たつた今、逃げていた響ちゃんと翼さんを捕まえたにや』

フアツ!?マジで!?

「マジかよ!?あの二人がこんな早く捕まるなんて……」

クリスちゃんの言う通りあの二人が開始三十分で捕まる事に驚いている。

あの二人を捕まるなんて……ネコアルクの奴、一体どんな手で二人を捕まえたんだ!

・  
・  
・

——一方その頃の響、翼チーム——

ネコアルクに捕まった二人は大きな木を背中に縄で縛られていた。「う、ぐう……不覚つ。まさかあんな手で私達を無力化させるとは」翼が顔をしかめてネコアルクの戦法に愚痴をこぼしている。

「うう……口がヒリヒリするよ〜。喉が痛い……」隣には唇が真っ赤になっている響が涙を流していた。

「まさか、奴にあんな手があるとは……」顔を上げた翼の顔をみると彼女の唇も響と同じように真っ赤になっていた。

「恐ろしいな、奴の……○○○○拳は」翼の視線の先に中身が少し溢れた○○○○が地面に転がっていた。

・  
・  
・

——それから四十分後——

『はいー！マリアさん、調ちゃん、切歌ちゃん捕獲完了にや！さーて、残りはクリスちゃんと狼のみ！すぐに捕まえるから楽しみに待ってにや？ニヤハハハハツ!!』

「チツ！まさかマリア達も捕まるとはな……。あのネコモドキ、実力を隠してたな？」

クリスちゃんがネコアルクがいつ来るか警戒しながら、愚痴をこぼす。

確かに俺もあいつの力を甘くみていたけど、まさかここまでとは……。

俺はあのナマモノの匂いや音を見逃さないように嗅覚や聴覚を最

大限に活用する。

「どこだ……どこからくる……?」

「来るなら来やがれ、蜂の巣にしてやる……!」

クリスちゃんがアームドギアを構えて、俺達はネコアルクがいつ出てくるか周りを警戒していると……。

「ほう……、周りを警戒しながら隙のない構え。見た所長い間共に過ごした相棒同士という感じかにや?」

以心伝心のコンビと言いたいけど、だが無意味にや」

「上かー!」

俺達の頭上からネコアルクの声が聞こえて、クリスちゃんがガトリングに変えたアームドギアを頭上に向けて撃ち放つが頭上から折れた枝だけが落ちていくだけでネコアルクの姿はなかった。

「くっ、どこに行った!」

「こつちだにや」

「なっ後ろ……ぐあっ!」

クリスちゃん!?

突然クリスちゃんの背後に現れたネコアルクが右手に持った何かをクリスちゃんの口に押し当て、そのまま力を失ったようにクリスちゃんの身体が地面に落ちた。

ちよっ、クリスちゃん大丈夫か!?

俺は慌ててクリスちゃんに近付いて前足でクリスちゃんの口に付いている何かを退かして無事なのか彼女の顔を見ると、両手で顔を抑えて身体をプルプル震わせていた。

マジで大丈夫クリスちゃん!?ま、まさか毒!?

俺が慌てているとクリスちゃんから声が聞こえた。

「……か……」

どうしたクリスちゃん!か?

「……か、辛iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiッ!!!?」

身体を起き上がらせて唇を真っ赤にしたクリスちゃんが涙を流し

て叫びだした。

クリスちゃんは口を抑えながら、辛さから逃れようと地面をゴロゴロと転がっていた。

え、辛いつてこれってまさか……グハアツ!?こ、この匂いはまさか!?

俺は地面に落ちている何かに鼻を近づけて匂いを嗅いでみると、様々な香辛料を混ぜた刺激的な匂いが俺の鼻を直撃し、俺は思わず身体ごと仰け反ってしまった。

麻婆豆腐!?しかも匂いからして激辛の奴!こんなのをクリスちゃんに食べさせていたのか!!

クリスちゃんの方を見ると辛さ耐えきれなかったのか白目を剥いて気を失っていた。

む、むごい……。まさか、翼さん達ももしかしてこの麻婆豆腐に……!?

「フッフッフツ……その通りにや。この麻婆豆腐はアチシの知り合いから教わった料理。口に入れた瞬間、あまりの辛さに悶絶してしまう至高の一品にや」

ネコアルクはどこからか出した麻婆豆腐を食べながら説明する。

さつきから気になってたけど、それどこから出した?それ以前に辛くないの?

「さてと……残りは貴様だけにやロボ!貴様を捕まえ、残りの勝負に勝てばアチシはNo.1アニマルになれる!おとなしく捕まるにや!」

ネコアルクは麻婆を食べ終えた後、俺に向けて指を突きつけてくる。

やれるものならやってみな?けどな……そう簡単に俺を捕まえられると思うな——シユンツ——よ……って消えた!?一体どこに?」

「どこを見てる?こっちにや」

姿を消した探そうと周りを見渡していると俺の下から麻婆の匂いと声が聞こえ、下を向いてみると麻婆豆腐を両手に持ったネコアルクがこちらを見ていた。

なっ!?!いつの間に!!

すぐにネコアルクから距離を取ろうと後ろに飛ばうとするが、俺が動く前にネコアルクの動きのほうが速かった。

(??ω??) キュピーンッ!

「麻婆豆腐真拳奥義!麻婆豆腐は甘口より激辛が一番!!」

ネコアルクが両手に持った麻婆豆腐を俺の口の中に無理矢理押し込まれた!

てか、辛あああつ!!

なにこの辛さ!?!これ麻婆って言えるの!?!この辛さは料理を通り越して兵器だよ!?

「ニヤハツハツハツハツ!どうだロボよ!この勝負アチシの勝ちにや!!」

俺が辛さに悶えて地面を転がっているとネコアルクが高笑いをする。

「あ、因みにお前に食べさせた麻婆はお前でも食べてもいいように配慮して作った特別麻婆にや。アチシに感謝してよく味わって食べるにや」

いらねーよそんな配慮!?!こんなの食べたら誰だってこうなるわ!

俺はゆつくりと立ち上がり、鎌を出してネコアルクに攻撃しようとするが……。

「む?まだ動けるかにや?それじゃ念のためもう一発」 スチャツ

ウエツ!?!いい、いらぬ!!もうそれ以上はいらぬ——

「はいドーンッ!!」

グハアツ!?

ネコアルクの三枚目の麻婆豆腐を口に押し込まれ、辛さの許容限界を超えた俺は意識を失った。(ガクッ)

——ロボ視点、終了——

——ネコアルク視点——

「イヤー、終わった終わったー。さすがに手こずったにやあ」

アチシは目の前に転がっているロボとクリスちゃんを視界に納め、両腕を上げて身体の凝りをほぐす。

「でもさすがは麻婆豆腐真拳、まさか装者達全員を倒すほどとは……恐ろしい技にや。店長に教わらなければ、こども簡単に捕まえる事は出来なかつたにや」

そう、今回アチシが装者達を捕まえる事が出来たのは、店長に教わった《麻婆豆腐真拳》のおかげにや。

この技は麻婆豆腐を使い、相手を倒す真拳。そのあまりの辛さに耐えきれない者が出てきて、いつしか禁断の真拳と言われるようになってたにや……。

でも、何故店長がこの禁断の真拳を使えたのかにや？

「ウーン……ま、別にいいか。今回それのおかげで勝てたんだし、気にしなくていいにや。うん！」

さーて、装者達が目覚める前に次の対決の準備をするかにや。

アチシは分身達を出して、ロボとクリスちゃんをみんながいるスタート地点に連れて行くよう指示してから、最後の対決の準備をしに行つたにや。

——ネコアルク視点、終了——



「うーん、ネコアルクってばどこにいるんだろ？」

平行世界に向かったネコアルクを探す為、私達は三組に別れている平行世界を回っていた。

「あの馬鹿ネコ、どんな理由で行ったのか知らねーが、見つけたら一発ぶん殴ってやる！」

「落ち着け雪音、気持ちは解るがそれはネコアルクを見つけた時に振ればいい。今は奴を見つけたのが先決だ」

拳を震わせているクリスちゃんに落ち着いてと話した翼さんは了子さんとエルフラインちゃんに作ってもらったネコアルクを見つけてる機械《ナマモノレーダー》に視線を向ける。

了子さん、ネコアルクに恨みがあるからってその名称はどうかと……。

「……………反応無し。この世界にもいないようだ」

「あーもう！一体どこほつつき歩いているんだよあの馬鹿ネコは！これで四つ目だぞ！」

頭を抱えたクリスちゃんが声を挙げる。

「喚いても仕方ない、一度元の世界に戻ろう」

私達はため息を吐いて他の世界に行こうと一度元の世界に戻ろうと、私達が出てきた場所に向かって行った。

本当にどこに行ったの？ネコアルク？

三本目！勝利を掴み取れ！フラッグレース対決！！

——ロボ視点——

や、やあ……ロボだよ。

前回ネコアルクの麻婆豆腐真拳と訳解らない技を喰らい、その辛さに動けなくなつて負けてしまった俺達。

今はネコアルクが次の対決の準備の為、俺達は冷水を飲んで辛さを誤魔化しながら拓けた場所で休んでいる。

っーか、あのナマモノよくもやつてくれたな……、まだ舌がヒリヒリするよ……。 (ゴクゴクツ)

「あうう……まだ辛いいい……」

「くっ、まさか剣が麻婆豆腐に負けるとは……まだまだ修行が足りないか……っ」

「あなた達はまだいいほうでしょ……。私達なんかヌルヌルする液体を全身に掛けられたと思つたら、ギアのインナーが溶けて、その後縄で縛られて動けなくなった所に無理矢理口に押し込まれたのよ？

……ほんと、酷い目にあつたわ……」

「ングツ……ングツ……プハアツ！うみゆう……ヒリヒリデース……」

「……しばらく麻婆豆腐は見たくない」

他のみんなも水を飲みながら愚痴をこぼしている。ほんと、加減つてものを知らないのかあのナマモノ？

あ、因みにみんなギアを解除していつもの服に戻っている。あの激辛麻婆を食べたせいでみんな歌えなくなったからね。

「う……っ」

さつきから唸っているけど、クリスちゃん大丈夫？まだうまく喋れない？

「あ、あんのびやかネコ……っ！

あたしにあんにや物を食べさせてくれりやがつてえええ……この借りは倍に返してひやるからな！」

クリスちゃんが食べさせられた麻婆は他のより辛すぎたみたいで

所々喋れにくくなっている。

「イヤーお待たせしましたー。ちよーつと、準備に手間取ってねー。最後の対決だから少し張り切ってしまったにや」

出たな、諸悪の根元。お前が食べさせた麻婆豆腐のせいでみんな涙目だよ。どうしてくれるんだ？

「ニヤニヤ？そうにやの？フーム、それほど辛くない麻婆の筈にやんだけどにやー？」

「！！それはお前の味覚がおかしいからだ（よ）っ（デースツ）！！！！」

「ニヤハハハハハハッ！」

みんなからのツツコミにナマモノは気にもせず、笑い声を挙げる。

「まー、さすがにアチシもやり過ぎたかにやと思っただし、お詫びにこのドリンクをどうぞ」

考えを改めたのか、ネコアルクはまたどこから出したエルフナインちゃんをデフォルメした絵がプリントされた、栄養ドリンクを差し出してきた。

なにそのドリンク？

「ニヤッフ、フ、フ……これはアチシの世界のエルフナインちゃんが作った特製ドリンクにや。これを飲めば口に残っている辛さがなくなるにや」（ΦωΦ）つハイドロー

ネコアルクがクリスちゃん達に一本ずつドリンクを渡していく。

大丈夫それ？ナマモノの事だから、なにかあると思うんだけど……。

「ありがたいけど、大丈夫なのこれ？なにか副作用とかないわよね？」  
ドリンクを受け取ったマリアさんが、ネコアルクに大丈夫か問いかける。

「ムムム……アチシを疑うのかにや？それにやら大丈夫。それはアチシの世界のエルフナインちゃんが店長が作った麻婆を食べてね、口に残った辛さをなくす為に頑張って作ったドリンクにやから、効能は折り紙付きにやよ」

そっちのエルフナインちゃんあの麻婆食べたのか……。

「そ、そう……わかったわ。あなたの世界でも、エルフナインが作った物なら安心して飲めるわね。ンクツ……あら？本当に辛さがなくなつたわね」

「ンクツ……ンクツ……プハア！本当だ、あれだけ辛かったのがなくなつてる！」

マリアさんが先に飲んでそう口にする、その後には響ちゃんが飲んだのを皮切りに他のみんなもドリンクを飲んで口に残っていた辛さがなくなつた事に喜んでいる。

「ほれ、お前も飲むにゃ」

あ、ああ……ありがとう。

俺は警戒しながら、ネコアルクが差し出したドリンクを口に咥えて、自身の液体を飲み干した。お？イチゴ味だこれ。

『あれ？』

俺の隣でプカプカと浮いているセレナちゃんが俺が飲んでいいるドリンクのラベルを見て声を挙げた。

どうしたのセレナちゃん？

『あの……ロボさん、そのラベルに信じられない数字が書かれていますけど……』

ん？信じられない数字？

「ふう……助かった。あのまま辛さが残っていたままだったら、仕事に支障をきたす所だった」

「そうね、それに喉を痛めてギアを纏えなくなつたら大変な事にな……る……」

マリアさんがドリンクに書いてある説明欄を見た途端、サーツと顔色が青くなる。

え？どうしたのマリアさん？

「ねえ、ネコアルク？ちょっと聞きたい事があるけどいいかしら？」  
「にゃ？」

「このドリンクの成分表示に二万カロリーと書かれているんだけど……私の見間違いかしら？」

「「「「つ!?!」」」」

「フア!? 本当だ! マジで書いてあるし!!」

「あ、それ? イヤー、実は材料の中にアチシの友達の仮面メイド男からもらったとある素材があつてねえ。即効性を持った代わりに物凄くカロリーを取るようになってサア……もう笑っちゃうよねー! ニヤツハツハツハツハブオロオツ!」

その言葉を聞いたみんなが空のドリリンクをネコアルクの顔面に向けて一斉に投げて、全てネコアルクの顔面に突き刺さった。

いやだから、なんでお前は人に迷惑をかけなきや気がすまないの?

空の瓶はゴミ箱に捨てました

### —— 閑話休題 ——

「さて! お互いに一勝一敗、後にも先にもこれが最後の対決にや!」  
ブレないなお前。あんな目にあつたのに、そのやる気はどこからきてるの?

装者達に睨まれながら、何事もなかったかのようにネコアルクが笑顔で次の対決の内容を話し出した。

「最後の対決は……フラッグレースにや!!」

フラッグレース?

「ルールは簡単、アチシとその狼と一対一でこの場からスタートして、この先にあるゴールにあるフラッグを先にゲットする事にや。」

し、か、も、レースの途中には三つのエリアがあつて、二つのエリアには様々な罠を沢山仕掛けさせてもらったにや。二つのエリアを抜けて、最後のエリアをどんな手を使つても、先に突き進みフラッグを手に入れたほうの勝ちにや。

あ、それと、公平の為に罠の設置はアチシの分身達に任せただからアチシもどこにあるかはわからにやいから安心していいにや」

お前が言う安心という言葉は信用できないけど……ああ、ようやくこの対決が終われるか……。

短い時間だったのに何故か長く感じるな。

「てなわけで、準備ができたなら勝負開始にや」

— S. O. N. G. 本部、ギャラルホルン保管室前 —

「ギャラルホルンが起動しただ?!? どういう事だ?」

「わかりません。ネコアルクさんがこの世界に来た理由を調べていたら、突然起動したんです! 一体どうして……」

「考えは後だ。もし、我々に敵対する者なら装者達がない今、俺が相手をしなければならぬ。緒川エルフナイン君を頼む」

「わかりました」

「よし…開けるぞ」

弦十郎がギャラルホルンが置かれている扉を開けて中に入ると

……。

「なっ?!? お前達は?!?」

・  
・  
・

— 数分後 —

「準備はいいかにかや?」

ああ、いつでもいいぞ。

俺はネコアルクに返事を返しながら、一気に駆け出す為少し姿勢を低くする。

ネコアルクの分身が持ったピストルを上に向ける。

「ソレデハ、イチニツイテ。ヨーイ……」(。ω。 )ノ。ポイツ

へ? なんてピストルを捨てるの?

——ジャキツ——

バズーカ!?

「スタートデス!!」

——ドーンツ——

「キャッツターボ!」ギユンツ

ああ、ズルツ!

あのナマモノ、俺がバズーカに驚いている隙に先にスタートしやがった!てか速っ!?

「ニヤツハツハツハツハツ!アチシが素直にスタートすると思ったかにや?勝つためなら手段を選ばない、それがこのアチシ、ネコアルク!」(ΦωΦ) bグツ

「セコいぞお前!急げロボ!」

わかってるよクリスちゃん!

俺はクリスちゃんに頷いて、急いでネコアルクの後を追いかけて行った。

・  
・  
・

——第一エリア、おでんステージ——

ネコアルクの跡を追いかけて第一エリアに着いたんだけど……。何このステージ!?

コンビニにある巨大なおでん鍋が俺の目の前に広がっていた!

「ニヤツハツハツハツハツ!驚いたかロボよ!」

ネコアルク!

声が聞こえた方に顔を向けると、少し離れた場所にこちらを見ているネコアルクの姿が見えた。

手足が生えたおでんの具達に捕まった状態で

いや、どんな状況!?

「イヤー、着いたのはいいけどいきなりちくわトラップにかかるとはニヤー。さすがのアチシも予想外」

この光景事態が予想外だよ!

「ウーム、やはりグラサンアフロの世界から持ってきた物は予想外な事が起きやすいねー。次からは別の世界のやつにするかにや……つてアチャツ!!

アレエエエーツ!?!にやんか身体が沈んでいるうううーっ!?

アーーーツ!」

おでんの具達に引つ張られて、ネコアルクはおでんの底に沈んでいった……。

……行こう。

見なかった事にした俺は、罨にもかからず先に進む事ができた。

・  
・  
・

——第二エリア、トラップステージ——

よーし、二つ目のエリア!ここを抜けて最後のエリアを抜けてゴールにあるフラッグをゲットすれば俺の勝ちだ!待っててねクリス



ちやん!!ウオオオオツ!!

——カチツ——

一気に駆け出そうとしたら、踏み出した右前足から何かを押す音が聞こえた。

カチツ?え、なんか嫌な予か——ガアアアアンツ!!——痛あつ!?

前足を上げて踏んだと思うスイッチを見ていたら、俺の頭の上から鉄板が降ってきた。

又オオオオオ……ツ。な、なんで突然鉄板が……?

「フ、フ、フ、驚いたかにや?」

なっ、ネコアルク!?生きてたのか!!

振り向くと口の周りにおでんの食べかすを着けたままのネコアルクがいた。

「フ、所詮はおでんの具材……アチシの胃袋の前に敵うと思ったかにや」ゲフー

あれを食べたの、凄いなお前……（引き）

ネコアルクはつまようじを啜えたまま、このステージの説明をした。

「わかっていると思うけど、このステージはトラップを中心としたエリアになっているにや。トラップはさつきみたいなの鉄板の他に落とし穴や冷水バケツ、更に痺れ肉や冷凍ビーム等のトラップがあるにや。油断するとケガじゃすまにやいからせいぜい気を付ける事にや、ではおっ先に——」

——カチツ——

——バリバリバリバリバリツ!!!——

「ギニヤアアアアアアアアアアアアツ?!?!?」

気を付けろと言った本人が真っ先に罠にかかったっ!?

「ぐふっ!ま、まさかすぐ目の前に対口ボ用の電撃トラップを踏むとは……」

そんな危険な物を用意するなよっ!?!バカなのお前!?

電撃で黒焦げになったネコアルクにツツコミを入れた俺は、トラップに気を付けながら先に進んだ。

・  
・  
・

——第三エリア、最終ステージ——

よ、ようやく最後のエリア……あのナマモノ、どんだけトラップを用意したんだよ……。

トリモチだったり、火炎放射だったり、その中でバリカントラップが一番最悪だった。逃げてても逃げてても俺のモフモフの毛皮を刈ろうと執拗に追い掛けてくるのは恐怖を感じたよ……。

「ゼエ……ハア……ゼエ……ハア……、あー、ヒドイ目にあつたにや」

出たなナマモノ……お前のおかげでこつちがヒドイ目にあつたよ。一応聞いておくけど、トラップはもうないよな？

「当たり前前によ。最初に言った通りどんな手も使つてでも突き進み、この先にあるフラッグをゲットした方の勝ちにや」

ネコアルクが説明した後、先にあるフラッグを指を指す。見たところ3kmくらいの距離がある。

よし、この距離なら俺の足だとすぐに到着できる。悪いなネコアルク……この勝負、俺の勝ちだ！

俺はすぐに駆け出し、ネコアルクを置いてフラッグの元へ走り続ける。

「甘いにや！言った筈にや、どんな手も使つてでも……行くぞ、久々のアチシの奥義！  
ニヤイオニオン・ハニヤイトイ  
ネコアルク大召喚!!」

え？今なんて言った——

(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)  
ニヤ(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)ニヤ(ΦωΦ)





アチシがフラッグをとる姿を見ておくんだにや！」

あ、くそ！待ちやがれ！

俺は身体を震わせて、よじ登っている無数のネコアルク達をふるい落とすがすぐに他のネコアルク達が俺の身体をよじ登ってくる。

こうなつたら鎌を出して切り刻みながら進むか……ん？

そう思い始めた時、空から大量のミサイルが飛んで来るのが視界に入り、それら全てネコアルクに向かって大量のミサイルが降り注いだ。

——チユドドドドドドドドドドドドンツ!!——

——ギニヤアアアアアアアアアアアアアアアツ!?!——

あれ？今のつてクリスちゃんの《MEGA DEATH PART Y》？でも、クリスちゃんはスタート地点に待機してるのになんで？疑問を浮かべていると倒れたネコアルクの元に見覚えがある人が近づいて行く。

その人物の姿を見た俺は驚いてしまった。何故なら——

「この馬鹿ネコ!!ようやく見つけたぞ！」

えっ、クリスちゃん!?でも、少しギアの形が違う?なんで?

何故なら、少し形状が違うギアを纏ったクリスちゃんがこの場に現れたからだ。

え?なんで?

——ロボ視点、終了——

終幕、ナマモノ平行世界襲撃事件（尚、ナマモノは吊るされている）

前回のあらすじ

ゴール間際にミサイルの雨が降り注いで、それがネコアルクに全弾命中して黒焦げになった。

——ネコアルク視点——

ロボとの対決をしている途中で、アチシの世界にいたイチイバルを纏ったクリスちゃんが見れた後、少し遅れてギアを纏った響ちゃんと翼さんが現れたにや。

三人を見たアチシは、すぐに逃げ出したんにやけど、三人の連携によつて、あっさりとお縄仕留められたになったにや。

気絶したアチシをお縄にした響ちゃん達は、詳しい説明をする為に一度、この世界のS・O・N・G・本部に戻つたにや。

そして、響ちゃん達に捕まったアチシは何してるのかというところ……。

—— S・O・N・G・本部、司令室 ——

「では、ネコアルク。お前に与える罰だが……」

1. 顔にしつぺ（響）
2. 刀で脳天から唐竹割り（翼）
3. 銃弾でハチの巣にされる（クリス）

「どの罰を受けたい？」

「1以外、死ぬ未来しか見えにやいんだけどっ!？」

自分の処刑方法の選択しているところにや。

「1にや!1でお願いするにや!」

「ほう、それでいいんだな?」

当たり前前によ。1以外を選んでもアチシの命がなくなるなら、響ちゃんのお仕置きのほうがまだマシにや。(まあ、死んでも直ぐに復活するけど)

「わかった。立花、後は頼む」

「あ、はい。わかりました」

アチシの答えを聞いた翼さんは、離れて立っていた響ちゃんに声を掛けてから、アチシから離れていったにや。

「ネコアルク」

「あ、響ちゃん。ニヤツホー」

「ニヤツホーじゃないよ、もう……心配したんだからね」

「ニヤハハハ……ごめんにや響ちゃん。ちよつと譲れない思いがあったから、つい衝動的に動いたにや」

そう、アチシがアマゾネス通販で頼んだ《月刊、みんなのアニマル》でアチシを差し置いて、一位になったあの狼をランキングから蹴落とす、アチシが一番になろうとこの世界に殴り込んで行ったのがこの話の始まりにや。

イヤー大変だったにやー、ロボを亡き獣にしようとしたこの世界のクリスちゃんの家お邪魔に不法侵入したり、かくれんぼでこの世界の装者達にボコられたし……。まあ、おいかけてこでロボに麻婆を食らわせて、少しスッキリしたからいいけどね。

「それじゃいくよ、ネコアルク?」

「ホイホイ、どうぞにや」

まあ、お仕置きと言っても、あの二人と比べて響ちゃんは良心的にやし、しっぺだから少しアザが出来るだけだから大丈夫でしょ……あの、響ちゃん?何故ギアを纏ったまま、アチシの腕を持つのでしょうか?

それだとアチシの細い腕が真つ二つに折れるのですが……え?腕





マリアさんの言葉を聞いた翼さんとネコアルクの世界の翼さんが揃って首を傾げる。

「まあ、お胸もそっくりにやしースコーンツ！ーニヤグツ!？」

あ、いつの間にか起きて、余計な事を言ったネコアルクの額に向こうの世界の翼さんが放ったアームドギアの小刀が突き刺さった。

「ふーん、こっちのあたしはそのデカイ狼と一緒に住んでいるんだな。後、少し触ってもいいか？」

「ああ、別にいいぞ。ロボは小さい頃に助けてくれてからずっと側にいてくれた、あたしの大切な家族だ。そっちにはロボはいないのか？」

「いないぞ。ま、あたしの場合は小さい頃にネコアルクと出会って、パパとママが帰ってくるまで一緒にいて遊んでくれたことかな」(な、なんだこれ……いつまでも触っていたい触り心地……！こっちのあたしは、これを毎日触っているのかよ……いいなあ)↑モフモフしてる「そうなのか？」(フフン、驚いたかそっちのあたし。ロボの毛並みはどんな奴でも、抗えない魔性の毛並みなんだ。ああ、それにしても相変わらずいい触り心地の毛並みしてるなあ……)↑こっちもモフモフしてる

まさか、二人のクリスマスちゃんにモフられる日が来るとは……世の中わからないなあ……。

「ウーム……やはり、どっちのクリスマスちゃんも小さい頃は素直で純粹無垢だったんにやねーズドンツ！……ゲイボルツ!？」

いつの間にか復活して余計な事を言ったネコアルクが向こうの世界のクリスマスちゃんが放った銃弾が側頭部を撃ち抜いた。

「ひ、響が……響が二人いる……はふうっ」クラリ

「ちよっ!?! 未来!?!」

「大丈夫、未来！しっかりして！」

「おおよく!?! 未来先輩が倒れたデス!?!」

「…でも、心なしかいい顔をしてる気が……?」

響ちゃんが二人いる光景を見た未来ちゃんが、嬉しすぎて顔を赤くした後、フラリと膝から倒れ込み、それを見た二人の響ちゃんは慌てて未来ちゃんの側にしゃがみ込んでそれぞれ、未来ちゃんの片手を握りしめた。

いや、響ちゃん。それ多分逆効果だと思う。現に未来ちゃんの顔が言葉に表現するのが難しいほど嬉しそうな顔をしてるから……。

「ほほーう。そんなに嬉しそうにしてるなら、未来ちゃん……。今アチシと契約すれば、様々な平行世界の響ちゃんに会える【響ランド】を経営してるんにやけど、どうですかーキュツ!……にやエツ!」

「ちよーつと、おとなしくしてよーねー?ネコアルク?」

「ちよ、響ちゃん……。絞まってる…絞まってるから、少し緩めて……!」

またいつの間にか復活して、余計な事を言ったネコアルクが、向こうの世界の響ちゃんに首をきつく絞められていた。

……さつきから見えていたけど、もしかしてアイツ、いつもあんな事をした後、あんな風にお仕置きされているのか?

『(その通りにや)』

このネコモドキ!?俺の脳内に、直接話し掛けてきた!?

・  
・  
・

—— 数日後 ——

—— クリスの家 ——

平行世界からやって来たクリスちゃん達がネコアルクを連れて、元の世界に帰ってから数日が経ったある日の朝。

—— ピンポーン ——

『スミマセーン！アマゾネス・ドットコムです！雪音クリスマスさんとロボさんにお届け物です！』

家の玄関から、宅配便の声が聞こえた。

「あ、はーい！珍しいな、家に荷物なんて？」

クリスマスちゃんがソファで代わりになっていた俺から立ち上がりながら返事をして、荷物を受け取りに玄関に向かっていく。俺はこの巨体だから、一緒に行くと初対面の人がびっくりしちゃうから、おとなしくここでクリスマスちゃんが来るのを待つ。

『じゃあ、私が代わりに見に行きますね』

お願いねーセレナちゃん。ふああ〜あ。

俺の代わりにセレナちゃんが、クリスマスちゃんの跡を付いて行くのを見送りながらあくびをする。

ん？ちよつと待て。宅配便の人、さつきなんて言った？アマゾネス・ドットコム？……なんか、どこかで聞いた事があるんだけど……どこで聞いたんだっけ？

ーガチャツー

あ、クリスマスちゃんが戻ってきた。

「なあ、ロボ。さつきの宅配の人がすごい格好だったんだけど、最近の宅配はあんなのが流行っているのかな？」

『あ、ロボさん。宅配にきた人すごい格好でしたよ！まさにアマゾネスって感じの格好で、スツゴク綺麗な女性でした！』

へー、そうなんだー。ところでさつき外で、雄叫びを挙げた女の人声が聴こえたんだけど……、そしてアキなんとか言いながら、何か壊した音がしたんだけど、空耳じゃないよね？そうだよね？

「ま、そんな事より、一体誰からの荷物なんだ？……げっ」

どうしたのクリスマスちゃん？何が書いてあった……げっ。

荷物の宛先欄に書かれた名前を見たクリスマスちゃんが顔をしかめる。それを見た俺は、首を傾げながら、クリスマスちゃんの後ろから名前を確認すると、思わず俺も顔をしかめた。何故なら……。

「ね、ネコアルクからの荷物かよ……」

そう、送ってきたのは数日前にこの世界にやって来たネコアルクか

らだった。

「あのネコモドキ、一体何のつもりで送ってきたんだ？」

クリスちゃんが文句を言いながら、包装紙を破いて中身を取り出すと……。

「……って、雑誌？」

取り出してみると、【月刊、みんなのアニマル】と書かれた一冊の雑誌が入っていた。

これって、ネコアルクが持ってきた雑誌だよな？

でも、よく見たら、表紙が真っ白な体毛をした猫なのかりスなのかわからないかわいい動物が描かれていた。てか、この表紙、フオウくんだ。

「何でこれを送ってきたんだ？……お？」

クリスちゃんは疑問を浮かべながら、雑誌のページを開いてしばらく捲っていると、とあるページを見て、ページを捲る手を止めた。

俺とセレナちゃんも後ろから覗いて覗いてみるとそこには……。

「……へえ、なかなかいい写真じゃないか」

『皆さん、いい笑顔をしていますね』

うん、そうだね。

開いたページに写っていた写真を見た俺達は笑みを浮かべた。何故なら……。

《家族ランキング一位》

【大切な家族】

そこに写っていたのは、ネコアルクを中心に、ネコアルクの抱きしめながら笑顔になっていた響ちゃんと未来ちゃんが写っていて、響ちゃんと未来ちゃんの後ろには調ちゃんと切歌ちゃんとマリアさんが立っている。更に響ちゃんの右隣には翼さんとクリスちゃんが立っていて、未来ちゃんの左隣にはセレナちゃんと奏さんが写っていた。

写真の下にあるコメントには、【皆さんとてもいい笑顔をしています

ね。観てるこつちも笑顔を貰っちゃいました！」と書かれてあった。  
「……あいつ、ロボを倒して一位になるって言ってた癖に、こつち  
じゃ一位になってんじゃないか。もしかして、これを見せたい為に  
送ってきたのかあいつ？」

ああー、なんかあり得そうだなあ……。

それに同意して、二人でこの雑誌を送ってきたネコアルクの姿を思  
い浮かべてみると、ドヤ顔でピースしてる姿が目につかび、思わず  
笑ってしまった。

ーピピピピッー

「はい、こちらクリス。……わかった、すぐにそっちに向かう。ーピッ  
ーロボ、出動だ。すぐに本部に行くぞー！」

「ガウッ！（わかったよ、クリスちゃん！）」

『私も一緒に行きますよー！』

笑っているとテーブルに置いてある携帯にS・O・N・G・本部  
からの緊急の連絡が入り、クリスちゃんが電話に出た後、俺に声をか  
けながら玄関に向かい、俺も返事をして、セレナちゃんを背中に乗せ  
ながら玄関に向かってきたクリスちゃんの跡を追った。

——ロボ視点、終了——

ロボ達がいなくなった後、テーブルに置いてある雑誌が風が吹いて  
ないのに独りでページが捲かれた。最後のページまで捲られると  
そのページには紙が挟まれており、それにはあるメッセージが書かれ  
ていた。

【ロボへ、

今回の勝負はアチシの負けだにや。次こそはアチシが必ず勝つ、首

を長くして待ってるにや。

——追伸、

近い将来、凄い困難が来ると思うが、お前達力なら必ず打ち勝つと信じてるにや。だから——

——頑張れよ、狼王ロボ。

ネコアルクより

【新アヴェ(下)VSナマモノ!シンフォギア界アニマルNo. 1三本勝負!!】

これにて、完結!!